

# 泥やがれきなどの後片づけ 「破傷風」に注意を

(7月8日 NHK NEWS WEB)

日本各地で記録的な豪雨が相次いでいます。被災し、住宅に流れ込んだ泥やがれきなどの後片づけをする際に注意したいのが「破傷風」です。厚生労働省は片づけのときのけがで破傷風に感染しないよう、丈夫な手袋や底の厚い靴を身につけることなどを呼びかけています。

破傷風は、泥や土のなかにいる破傷風菌が傷口から体の中に入ってかかる感染症で、発症すると口が開けにくくなったり、首筋が張ったりしたあと、体のしびれや痛みが出ます。しびれや痛みは、悪化すると全身に広がって呼吸困難になり、最悪の場合、死に至るおそれもあります。

東日本大震災の被災地でも破傷風を発症したケースがあり、自宅の後片づけやボランティア活動に当たる際は注意が必要だということです。

このため厚生労働省は、浸水した住宅の後片づけをする際は、次のことに気をつけるよう呼びかけています。

- ▽丈夫な手袋や底の厚い靴を着用する。
- ▽長袖など肌が見えない服を着用する。
- ▽けがをした場合は、小さな傷口でもきれいな水で洗い流す。
- ▽傷が深かったり傷口が汚れたりした場合、は早めに医療機関を受診する。

また厚生労働省によりますと、破傷風にはワクチンが有効で、通常は子どものうちに接種を受けますが、10年がすぎている場合は改めてワクチンを接種したほうがよいといわれています。

※破傷風ワクチンはいわゆる「四種混合」に入っているため、乳児期の定期接種に組み込まれていますが、効果は10年程度なので、11才でジフテリアとの二種混合の定期接種を受けていない場合、ワクチンの効果は失われています。

## 水害の後片づけに参加するときの服装

災害には「後片づけ」が付きもの。ケガのリスクを防ぎ少しでも気持ちよく働くために、非常持ち出し袋や避難場所の備蓄の中に「後片づけ用の服装/装備」を加えておくとよいでしょう。  
(避難の段階では、水位によっては長靴は不向きの場合がありますが、後片づけの際には必須です)



## 子どもは汚泥の掃除以外の手伝いを！大人より高いリスクがあります

子どもは体が成長過程にあるため、有害物質にさらされると大人より大きな影響を受けます。免疫システムがまだ不十分で、様々な病気に対する感染リスクも高いです。

また背が低いと、地表の汚泥から舞い上がる有害物質を大人より吸い込みやすく、呼吸回数も大人よりも多いため、災害時には成人より多くの有害な化学物質を吸い込みやすくなります。

水害後の片づけでのリスクは、様々な汚染物質が混じった水や泥、そしてそのような状況でのケガの危険性にあります。

アメリカ疾病予防管理センター(CDC)は、洪水などが発生した後の水について「人や家畜の排泄物(下水が溢れた場合)、家庭や医療機関、工場から出た有害廃棄物(農薬や工業廃棄物)など病気に繋がる可能性のある汚染物質のほか、木材やがれきなどケガの原因となるもの、ネズミなどの動物が含まれている可能性がある」としています。

これらの汚水にさらされると、「ケガによる感染症(破傷風含む)、皮膚の湿疹、大腸菌やサルモネラ感染症などの感染性胃腸炎にかかる可能性」があります。

他にも、子どもは「好奇心から様々なモノを触りたがるため、大人なら近づかないような危ないものにも直接触れようとする」「体重あたりの体表面積が大きいと、外気温の影響を受けやすく低体温にもなりやすい」などの理由で、水害後の片づけをするのはリスクが高いと指摘しました。

アメリカ小児科学会も、「子ども、そしてできる限り10代も水害後の清掃には関わるべきでない」とし、「清掃されていない場所には、子どもは近づけないようにすべき」と呼びかけています。

汚泥の掃除以外にも子どもができることはたくさんあります。家の中の危険でない箇所の片づけや、より小さな子どもの遊び相手など、子どもが安全にできる手伝いを探すことを提案します。

(佐久総合病院佐久医療センター小児科医長・坂本昌彦さん/聞き手・富田すみれ子(Buzzfeed)/抜粋は文責による)



MONTHLY

「東北に黒糖を送ろう！大作戦しんぶん」改め  
復興支援「すけやんきた」しんぶん  
かめぼん

「すけやんきた」とは宮城県登米市あたるの言葉で「ボランティアに来たよ」という意味である

